

「新たな協働関係を模索して」

渉外委員長 藤守義光（柏木教会長老）

先の大会で大韓イエス教長老会（以下 合同）との宣教協約締結が決議され、過日締結式が行われました。九州中会では、この協約締結に先立って既に合同から宣教師を迎えています。この協約の締結は、日本キリスト教会の渉外関係においてとても大きな意味を持っています。というよりも、この協約の締結は、日本キリスト教会の対外協力関係を大きく変えたと言っても過言ではありません。

日本キリスト教会は、対外関係について、何か明確な基準を持っているわけではありません。唯一憲法が規定するのは、「交渉や協約の締結にあたっては、相互主義を原則とする」ということだけです。これまでは、世界改革教会共同体[以下 WCRC]の加盟教会で、神学的立場に近い教会、また歴史に関わりの深い教会と宣教協約を結び、WCRC という場をいわば基軸にして関係を深めてきました。国内の日本キリスト改革派教会、また日本基督教団連合長老会との交わりも、旧日本キリスト教会という歴史的な文脈の中で生じている交わりです。しかしながら、合同はそれらの教派と全く異なり、同じ改革長老教会の伝統には立つものの神学的に非常に保守的で、女性を教師や長老に任職せず、世界教会協議会[WCC]を否定するなどそのエキュメニカル理解も私たち日本キリスト教会とはまったく異なります。そのような教派と宣教協約関係に入ることは、これまでであれば考えられないことでした。しかしながらそれが実現したことは、協力できる接点が見いだせれば、私たちは神学的に異なる立場にある教会とも積極的に関係を結び、協力関係を構築するのだという姿勢を表明したことになります。

現実に各個教会ではすでに、防災やディアコニアといった分野で、これまで交わりのなかった教会や、NGO や市民団体との協働が始まっています。私の属する柏木教会でも、将来の災害に備えて、日本福音ルーテル教会、日本バプテスト連盟、ウェスレリアン・メソジスト教会といった、いわばこれまでご近所なのに「口も利いてこなかった」教会と、ようやく顔と顔を合わせて協力する道を探る作業が続いています。フードバンクや子ども食堂といったディアコニアの業のために、地域の社会福祉協議会や、さまざまな同じような活動を行っている NGO や団体と、肩を並べて一緒に地域に仕える活動を担っています。それは、違いにだけ目を向けて拒絶するのではなく、それぞれの神学や職制を尊重しながら、どのように協働できるのかということを実際に模索するということです。これは図らずも、私たちの先達が教団から離脱する際に諸教会に送った「他教会の伝統や信仰的立場を尊重し、出来得るかぎり友好的でありたいと希望して居ります」というメッセージと呼応しています。

宗教全般に対する恐怖や懐疑心という逆風が吹き、キリストの教会がどこも高齢化し会員減少という負のスパイラルに苛まれる今だからこそ、お互いの立場を尊重しながら、より積極的に協力と協働の道を、より多くの人達と探り求めていく必要があるのではないのでしょうか？ 私たちに与えられているのは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」という使命です。しかも聖書が指し示すように、ここにおける隣人とは分け隔て無く全ての人々を意味しており、その隣人に仕えることはすなわち私たちの主に仕えることを意味すると告げます。そのために、私たちは力を合わせて「総力戦」で臨む必要があります。主と隣人に仕えるために、誰とどのように力を合わせるができるのか、これまでのやり方にこだわることなく、これまでの関係に捕らわれることなく、協働関係を模索して、主と隣人に仕えていきたいと願います。

「タイ・キリスト教会について」

2023年の「世界の教会を覚える日」(8月6日)は、タイ・キリスト教会(Church of Christ in Thailand)を覚えます。タイへのプロテスタント宣教は1828年に始まり、1838年にはアメリカの長老派の教会から宣教師が派遣されました。その後も様々な宣教師の働きによって伝道が続けられ、1934年には教派を超えた(エキュメニカルな)一つの教会としてのタイ・キリスト教会が設立されました。その後、第二次世界大戦後にタイに進出した様々なプロテスタント教会の内のいくつかが加わる形で、タイ・キリスト教会は1976年までに総会・地域教会・各個教会という3つのレベルの組織を持つ、完全な自治権を有する教会となりました。2022年の時点で、20万人近い数の教会員と1000以上の教会と説教の拠点、2つの大学と神学校、7つの病院を持つこの教会は、宣教を中心としながらも、青少年の教育、ヘルスケア、HIV/AIDSの教育と予防という分野にも積極的に取り組んでいます。さらに、1970年代はカンボジア難民、現代はミャンマーからの難民を主な対象とした難民支援活動を展開し、性産業に従事する女性の数を減らし、部族の女性たちに職業訓練を提供するための働きにも注力しています。

タイ・キリスト教会は、わたしたち日本キリスト教会も属している「世界改革教会共同体(WCRC)」の一員であり、2025年10月に「あなたの証人とならせ続けてください」という主題のもとにチェンマイで開催されるWCRC総会の準備において、中心的な役割を果たしています。この総会には日本キリスト教会からも、青年を含む代表を派遣したいと考えていますので、とくに関心がありそうな青年があれば、渉外委員会にご紹介くださいますと幸いです。タイの隣人の教会のため、またWCRC総会のため、祈りを合わせていきたいと思えます。

「世界の諸教会との交わりの中で」

—台湾基督長老教会第68回総会に招かれて—

大会議長 有賀 文彦(大垣教会牧師)

台湾基督長老教会(以下PCT)第68回総会が4月18日(火)~20日(木)台北市内のホテルで開かれ、来賓として出席しました。コロナ禍もあって、PCT総会に海外から来賓が招かれたのは久しぶりで、日本キリスト教会からの出席も2019年以来4年ぶりでした。

今回の総会は、コロナのためか通常より1日短い日程で、内容的にもそう大きな議題はないという話でした。またPCTでは、期間中来賓のために教会やキリスト教関係の場所・施設の訪問も企画してくださるので、わたしが議場に陪席したのは1日目だけでした。

ただ、そうした中でも印象に残ったのは、PCTが世界の改革教会と交わりを持ち、この総会がそういう諸教会の交わりの場にもなっていることでした。アジア、アメリカをはじめ11の国・地域から36人の代表が出席していました。また日本からも、他に2つの教会から代表が来ており、日本では普段交わりのなかった方々ともお話しする機会となりました。

さらに総会の中でも、選挙の開票作業の合間に、台湾から海外に(日本も含めて!)派遣されている宣教師たちや、海外から台湾に宣教に来ている方々の報告が延々となされ、世界の教会の交わりの豊かさに直接触れる思いでした。また、この総会の後に宣教師を派遣しているアジア諸国に寄って宣教師を訪ねる予定だと言う代表の方もいました。

日本キリスト教会では、こうした諸教会の交わりという視点があまりないのが実情ですが、将来の世代を中心に広く門戸を開いていくことの大切さを思いました。

大韓イエス教長老会(合同)との宣教協約締結式報告

渉外委員 大石周平 (多摩地域教会牧師)

1912年設立の「大韓イエス教長老会」より、59年に分かれた教団である「大韓イエス教長老会(合同)」(以下GAPCK: The General Assembly of Presbyterian Church in Korea)は、ウェストミンスター信仰基準を重んじる改革主義の教会であり、日本キリスト教会(以下新日キないしCCJ: The Church of Christ in Japan)同様に長老制度を採ります。昨年の渉外委員会だより第46号で、同派出身の応援宣教師李炳斗(イ・ビョンドウ)牧師がご紹介してくださっているとおり、163の中会に、255万人以上の信徒が属する大きな教団ですが、このたび、日本キリスト教会との「歴史的な関係」の重要性が相互に認識され、公的な交わりが始められることになりました。戦前・戦中・戦後の旧日基・教団・新日キの東アジアにおける歩みをふりかえり、改めまして、主のみ前にこうべを垂れる思いがいたします。このたびの宣教協約締結について可決した第69回および71回大会記録にもご確認いただけるとおり、宣教協約文の冒頭には、私たちの「韓国・朝鮮の基督教会に対して行った神社参拝強要についての罪の告白と謝罪」(1990年)が先方に受け入れられたことが明記され、「東北アジアにある教会として、ともに和解に基づく交わりの深化に務め、キリストにあって固い絆で結ばれている赦しと一致を見えるように発展させる」ことを目指す旨が記されています。本紙の巻頭言で渉外委員長が指摘するとおり、神学的な強調点や実践面、あるいは端的に教会の規模において、大きな違いも目立つ二教会ですが、互いの独立性を重んじ、平等原理のもと、主にある一致と共働をはかることにおいて、み前にただただ誠実でありたいと願います。宣教協約締結式は、2022年待降節の12月12日(月)、大阪姫松教会において、韓国より三人の代表団と、それぞれのお連れ合いを迎えて行われました。大阪姫松教会の鈴木和子長老の奏楽に始まり、韓日讃頌歌第1番/讃美歌(54年版)539番を歌ったのち、大会議長有賀文彦牧師が挨拶・祈禱。両教会の公的な交わりが「……対立と分断の困難な時代にあって、主にある和解と一致のしるしとなり、主の栄光を表すものとなるように」、ともに感謝と願いを捧げました。その後、エフェソ4章1~6節を、GAPCK世界改革主義復興委員長カン・ジンサン牧師が韓国語で、CCJ(前)大会渉外委員長富永憲司牧師が日本語で朗読。「……平和の絆で結ばれ……ひとつの希望に結ばれた」二つの教会として、代表者団・各中会代表・宣教師および通訳の崔炳一牧師を紹介し合ったうえで、協約本文が、CCJ大会書記藤田英夫牧師によって日本語で、GAPCK世界教会交流協力委員長キム・ジョンフン牧師によって韓国語で朗読されました。ここで、代表各2名による署名により調印が果たされ、宣教協約は公的な発効を確認されたかたちとなります。続く挨拶をなされた総会長ウォン・スヌン牧師は、「世界の改革教会が教派を越えてともに成長する」という「宣教の夢」を分かち合いたいと呼びかけ、「神の国と神の義のため」の伝道協力に、主の祝福を求める祈りへと導かれました。終わりに、一同で韓日讃頌歌第2番/頌栄541番を歌い、交わし合った固い握手と記念品に象徴される、祝福された締結式が閉じられました。

(締結式の限定公開動画→<https://youtu.be/pMBjXo5dmmk>)

「在日大韓基督教会との宣教協約締結 25 周年記念集会について」

永井 文（名東教会 伝道師）

2022 年 11 月 17 日午後、在日大韓基督教会名古屋教会で、日本キリスト教会と在日大韓基督教会の宣教協約 25 周年記念集会が開催されました。これまでわたしたちは、日韓青少年交流ツアーを共催して日本と韓国を行ったり来たりするなど、親しい交わりを深めてまいりました。その中では、在日大韓基督教会の皆様にお世話になるばかりで、わたしたちはなかなか力になることができない場面も多くあります。その様子を近くから見ていますと、日本キリスト教会の一員としてせめてこの記念集会には足を運びたい、という気持ちでおりました。加えて、名古屋でこのような大会規模の集会が行われることは稀ですから、ここのところ中会や大会の集まりになかなか行けていない個人的事情もあり、ぜひ参加したいものでした。しかし当日息子 1 歳が微熱。結果、足を運ぶことはできませんでした。それでも諦めきれず、WEB で参加できることを思い出し、幸い申し込みも不要だったので、スマホを片手に参加することができました。このために裏方の皆さまが環境を整えてくださったことを思うと、本当に感謝しています。

午後 1 時から、まずは記念礼拝が始まります。お昼寝前にぐずる息子 1 歳の泣き声で音声が聞き取れず、画面では何かを話しているようにも思われましたが、ほぼ何をしているのか分かりませんでした。イヤホンを準備すれば良かったのかもしれませんが、気づいた頃にはもはや動けませんでした。対面ならば、今は献金だとか祈りだとか、周りの様子を見れば分かりますが、一人ではそうはいきません。礼拝が終わったこともよく分からず、画面では他の WEB 参加の方々が次々とビデオをオンにしているのに気づきました。不思議に思っていると、チャットで様子を教えてくださっているではありませんか。写真撮影の時間だったのです。なんとかついていくことができました。

お昼寝に成功した頃、講演が始まりました。「歴史の隠蔽と忘却に抗い—関東大震災朝鮮人虐殺 100 周年を教会はいかに迎えるか—」と題し、金性済先生より、厳しくも熱意にあふれた、これからのキリスト者としてこの世に生きる者の歩みを鼓舞してくださるような講演でした。「朝鮮人が毒を入れた」「朝鮮人が放火した」などとデマが流れ、ただでさえ大地震で甚大な被害を受けている中、朝鮮の人たちが置かれたつらい立場を思うと言葉が出ない歴史です。様々なデマは現代でも見聞きしますから、他人事には思われません。人は弱さから、悪い方へと誘われずにはいられないのでしょうか。

しかし、わたしたちはキリストを知っています。人が間違った方向へと歩むことは、消せない事実です。罪が無くなることはありません。それでもわたしたちが手を取り合い協力しあえるのは、キリストが中心におられるからです。キリストの執り成しのおかげであると、感謝の思いに立ち返ることができました。これからも、誘惑はあるでしょう。そんなとき、立ち止まって方向転換することを求められているのがわたしたち教会なのではないかと、このような集会在教会で持たれることの意味に思いを巡らす記念集会でした。

【編集後記】編集の都合上 3 月の分が発行できなかったことに加えて、海外との教会との連絡にすれ違いがあり便りのお届けが遅れました。また初版において、誤ってタイにおけるプロテスタント宣教の年号を 1823 年と記載してしまいましたが、正しくは 1828 年(アメリカの長老派の教会から宣教師が派遣は 1838 年)です。深くお詫び申し上げます。(小林宏和)